



Title	中国語の「起來／下來／下去」におけるアスペクチュアルな意味用法：日本語の「てくる／ていく」との対照研究
Author(s)	温, 雅瑠
Citation	大阪大学言語文化学. 2001, 10, p. 231-244
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/78006">https://hdl.handle.net/11094/78006</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中国語の「起來/下來/下去」におけるアスペクチュアルな意味用法

—日本語の「てくる/ていく」との対照研究—\*

温 雅珺\*\*

英文裡原表空間移動概念的“go”亦可用“be going to”的形式來表示時間上的未來。這種表示空間的用法演生為時間用法的現象在人類語言的進展上是很普遍的。本文即在探討中日文的移動動詞「くる/いく」和“來/去”演生為時間用法時的異同。

首先，先行研究也曾指出表<開始態><漸進態>等時間用法時，“起來”能與意志動詞、非意志動詞接續，而「てくる」只能與非意志動詞接續。但筆者對照比較“起來”和「てくる」的時間用法時，發現“起來”和「てくる」可以接續的非意志動詞仍有以下三點不同。

1. 在中文裡非意志動詞若為“動詞+結果補語”則不能和“起來”接續。「失う、見える、聞こえる」等非意志動詞可和「てくる」接續，但“失去、看得見、聽得到”等非意志動詞為“動詞+結果補語（去、見、到）”結構，不能和“起來”接續。
2. 是否為“形容詞兼用語”？中文裡有一部份動詞和形容詞的文法現象相似。如動詞“愛、悲傷”和形容詞一樣可用“很、非常”等程度副詞修飾，而形容詞“慢、亮”和動詞一樣後面可直接加“了、起來”等動態助詞。此類動詞和形容詞暫稱為“形容詞兼用語”。“起來”能前接的非意志動詞，幾乎都可用“很、非常”來修飾。換句話說，「てくる」前接的非意志動詞若能翻譯成“悲傷、慢、亮”等可用“很、非常”修飾的詞時，則「てくる」能翻譯成“起來”。
3. 靜態動詞「違う、似る」等可和「てくる」接續，但“不同（不一樣）、相似”等與“起來”接續的例子並未發現。

其次，“起來”和「てくる」不相對應的原因在於兩者所表示的中心概念不同。“起來”的中心概念雖表“進入新的狀態”，但受“起”的影響，語義偏重於新狀態的“起始階段”，所以“起來”雖可和“突然、逐漸”等副詞接續，卻不能和“相當”等表程度高的副詞接續。因“相當”等表程度高的副詞和“起”所表示的“起始”語義相悖。而「てくる」的中心概念來自「くる」，表示「接近某一基

\*中文「起來/下來/下去」的時間用法—與日文「てくる/ていく」的對照研究—（温 雅珺）

\*\*言語文化研究科博士後期課程3年生

準點」，可接續的副詞除「突然、だんだん」之外、尚可與「大分」等表程度高的副詞接續，表示接近前接動詞語義的最初、中間、最後等任一階段。即，“起來”和「てくる」所表示的中心概念不同造成了兩者所能接續的副詞也不同。

## はじめに

直示的移動動詞の文法化は普遍的なプロセスである。それらが時間用法へ文法化した現象の例は、英語の“be going to”をはじめ、日本語の「てくる/ていく」、中国語の「起來/下來/下去」などに見られる。本稿では動詞の後につく「起來」と「てくる」におけるアスペクチュアルな意味用法（＝時間的意味用法）を中心に考察し、「下來/下去」との関連に触れ、特に「起來」と「てくる」が対応しない現象についてその原因を明らかにすることを目的とする。

## 1 先行研究及びその問題点

### 1.1 「起來」と「てくる」の対照研究に関して

日本語の「てくる」と中国語の「起來」におけるアスペクチュアルな意味に関する対照研究における代表的なものとして、張（1993）、靳（1994）（1995）等がある。

張（1993）によると、日本語「てくる」と中国語「起來」が接続する動詞類型の違いについては<表1>のようにまとめられる。（<表1>は張（1993：121,122）に基づき、筆者が整理したもの）

<表1>

アスペクチュアルな意味	動詞類型	中国語	日本語
動作、行為、性質、状態の始まり或いは出現	意志動詞	起來	～だす・～はじめる
	非意志動詞	弱→強型	てくる
		強→弱型	下來
性質・状態の漸次的な変化	弱→強型	起來・下去	てくる・ていく
	強→弱型	下來・下去	

・弱→強型：「亮（明るい）、緊張（緊張する）」など。

・強→弱型：「黒（暗い）、弛む（弛む）」など。

つまり、「起來」は意志動詞と非意志動詞の両方とも共起できるが、「てくる」は非意志動詞としか共起できない。非意志動詞の場合、「起來」は「亮（明るい）、緊張（緊張する）」などのような「弱→強型」の非意志動詞としか共起できないが、「てくる」は「弱→強型」だけではなく、「暗い、弛む」などのような「強→弱型」の非意志動詞とも共起できるので、「起來」と「てくる」は対応していないという。しかし、次の例が示

すように、「起來」は「強→弱型」の非意志動詞とも共起できる。

(1) …, 他仍然不免有點悵悵。他的脚步就慢起來了。(子)

…、やはり残念でたまらない。歩みはしだいにのろくなる。(竹内訳)

次に、斬 (1995) では「起來」と「てくる」の違いについては次のように述べられている。『しはじめる』の意味で、『してくる』という形になるのは『(雨が) ふる、(雨が) ばらつく』のような作用を表す動詞や、『聞こえる、見える、予感がする、思われる』のような可能や感覚を表す動詞である。…。しかし、『V+起來』の表現で表せるのは作用を表す動詞と結びつく時のみで、可能や感覚を表す動詞の場合は『開始+V』の表現としなければならない (p.51,52)。しかし、次の例が示すように「変る」などのような作用を表す動詞の場合は「てくる」と共起できるが、「起來」は共起できない。

(2) 空はまた変って来た。(三四)

天空又起了變化。(書訳) →\*「天空又變(化)了起來。」

## 1.2 問題提起

以上のように、「起來」と「てくる」がどこまで対応しているのか、どの部分に対応していないのかについては先行研究でははっきり述べられていない。また、先行研究の結論では次のような「起來」と「てくる」が対応していない現象が説明しにくい。

(3) 「…。この雪はこの間一尺ばかり降ったのが、だいぶ解けて来たところです。」(雪)

「…。這場雪是前幾天~~下的~~，只有一尺左右，已經融化得差不多~~了~~。」(蕭訳)

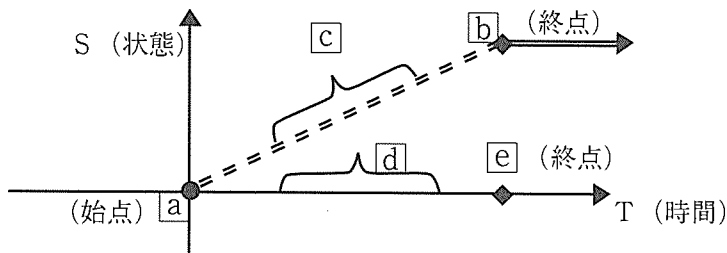
→\*「相當融化起來了」

これらの問題点を解決するために、「起來」と「てくる」が表す中心的な概念の違いと接続する動詞類型の違いを明らかにする必要があると思われる。

## 2 「起來」と「てくる」におけるアスペクチュアルな意味用法

### 2.1 アスペクチュアルな意味の分類

<図1>運動の過程



〈図1〉の[a]は運動の始点、[b]と[e]は運動の終点、[c]と[d]は運動の真中の段階を表すとすると、[b]の表す終点は新たな結果状態が生み出される意味が含まれているのに対し、[e]の表す終点は主体または客体の状態の変化には無関心で、単に運動が終了することについて注目している。また、[c]は時間の推移のなかで、状態の変化が累積的に漸進することを表すのに対し、[d]は運動が継続する側面のみを表し、主体または客体の状態がどのように変化するかについては無関心である。ここで、[a]~[e]の表すアスペクチュアルな意味を次のように呼ぶこととする。

〈表2〉

アスペクチュアルな意味	定 義	表 現 方 式	
一回きりの運動	[a]=〈始動相〉	運動の始まりを表す	「降りだす」「読み始める」
	[b]=〈結果相〉	運動が完成されることによって新たな結果状態が生じることを表す	「編みだす」「書き上げる」
	[c]=〈漸進相〉	運動が累積的に漸進することを表す	「寒くなってくる」
	[d]=〈継続相〉	運動が継続的に行なわれることを表す	「彼は本を読んでいる」 「彼は本を読みつづける」
	[e]=〈終止相〉	運動の終わりを表す	「読み終わる」

以上の[a]~[e]は出来事の一回きりの運動を表すものであるが、ほかに同じ主体が同じ運動を繰り返す、あるいは複数の主体が同じ運動を繰り返すことを表す場合もある。これを〈反復相〉と呼ぶこととする。

## 2.2 動詞分類

「起來」と「てくる」におけるアスペクチュアルな意味を左右する主な要素は動詞・コンテキスト（副詞または数量詞など）がある。中核を占めるのは動詞である。本稿では工藤（1995）に従って〈表3〉のように動詞を下位分類する。

〈表3〉

動詞の三大類	定 義
(A) 外的運動動詞	時間の中に開始・展開・終了し、場合によっては結果を残す、ものの動態的な運動をとらえている動詞らしい動詞である。
(B) 内的情態動詞	(A)の運動動詞と共通して、時間的展開性があるが、運動動詞=外的事象動詞と異なり、〈思考・感情・知覚・感覚〉という人の内的事象をとらえている。
(C) 静態動詞	時間のなかへの現象を問題にしえない「異なる、優れている」のような〈関係・特性〉をとらえているか、時間のなかに現象したとしても、時間的展開性のない「存在する、面している」のような〈存在・空間的配置〉をとらえている。

(A) 外的運動動詞が<動作<sup>1)</sup>>か<変化<sup>2)</sup>>かという観点と、<主体>か<客体>かという観点からさらに三つに分けられている。

・ (A.1) 主体動作・客体変化動詞 ・ (A.2) 主体変化動詞 ・ (A.3) 主体動作動詞

また、主体の意志という観点から (A.1) (A.2) (A.3) (B) (C) をそれぞれ意志動詞と非意志動詞に下位分類することができる。前者は主語の意図的な動作・行為を意味する動詞であり、後者の主語は自分の意志で動作するのではなく、自然に何らかの変化を被るものである。以下本稿では意志動詞を (A.1') (A.2') (A.3') (B') (C') のように、非意志動詞を (A.1'') (A.2'') (A.3'') (B'') (C'') のように表記することとする。

<表 4 >

動 詞 分 類		典 型 的 な 動 詞 例
意志動詞	(A.1') 主体動作・客体変化動詞	閉める、開ける、隠す、編む、買う、殺す……
	(A.2') 主体変化動詞	隠れる、集まる、出る、入る、立つ……
	(A.3') 主体動作動詞	書く、言う、歌う、走る、漕ぐ、揺らす……
	(B') 内的情態動詞	思う、考える、疑う、期待する、望む……
非意志動詞	(A.1'') 主体動作・客体変化動詞	失う……
	(A.2'') 主体変化動詞	温まる、変わる、死ぬ、腐る、晴れる、曇る……
	(A.3'') 主体動作動詞	降る、揺れる、燃える、光る……
	(B'') 内的情態動詞	いらいらする、震える、見える、聞こえる……
	(C'') 静態動詞	似る、違う、面する、存在する、優れる

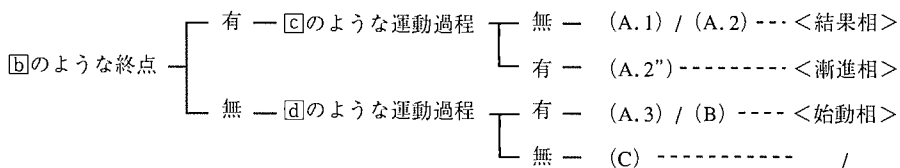
次節では、以上の動詞類型がどのように「起來」または「てくる」におけるアスペクチュアルな意味を左右するかを論じる。

### 2.3 動詞の種類と「起來」のアスペクチュアルな意味

「起來」の中心的な意味は新しい状態への変化を表す。基本的に動詞の語彙の意味に規定され、「起來」の表す新しい状態への変化によって意味に三つのバリエーションが生じる。

<図 2 >

([b]、[c]、[d]はそれぞれ<図 1 >の終点、真中の段階を表す  
[b]、[c]、[d]に該当する)



<sup>1)</sup> <動作>：成立しさえすれば、どこで中止されても動作が成立したといえる。必然的な終了限界のない非限界な運動のタイプである。(工藤 1995：73)

<sup>2)</sup> <変化>：新たな結果状態を生み出すことによって必然的に終了する限界な運動のタイプである。(工藤 1995：72)

1. <結果相>: 基本的に「包(包む)・蓋(蓋をする)・聚集(あつまる)・關(しめる/しまる)…」のような(A.1)と(A.2)動詞グループと共起する。(A.1)と(A.2)動詞グループの中に内的限界点**[b]**をもち、運動の過程**[c]**を無視する意味が含まれているからこそ、「起來」のアスペクチュアルな意味が<結果相>になると思われる。

(4) 菊英又把盒子蓋起來，同滿喜繼續去打掃。(三里)

菊英は蓋をしてから、また滿喜といっしょに掃除を続けた。(岡崎訳)

(5) 便道上塵土飛起多高，與天上的灰氣聯接起來，結成一片毒惡的灰沙陣……。 (駱)

裏道は埃が舞いあがり、空の灰色のガスとまざりあって厚い砂の幕となり… (立間訳)

しかし、(A.1/A.2)に属する動詞すべてが「起來」と共起できるわけではない。劉(1998)で指摘されているように、「起來」などによって表される<結果相>の意味は特殊であり、接続できる動詞は限定されている。例えば、「起來」は「外す、忘れる」のように「一つに集中して、結合する」ことを予想できない(A.1/A.2)動詞につくことができない<sup>3)</sup>。

「V+(結果相)起來」○: 關(しめる)、連接(連接する)、集中(集める)

「V+(結果相)起來」×: 卸(外す)、忘記(忘れる)、開(開く)

2. <漸進相>: 基本的に「亂(乱れる)・胖(太る)・慢(のろい)・快(早い)・黒(暗い)…」のような単語と共起する。「起來」と共起するものは形容詞に属しているのかそれとも動詞に属しているのか判断しにくい。劉ほか(1988:169)によれば、殆どの形容詞は「很(とても)・非常(非常に)」等の程度副詞の修飾を受けることができるという。便宜上、本稿では「亂(乱れる)・慢(のろい)」のような単語を(A.2)動詞グループに所属させ、「很(とても)・非常(非常に)」の修飾をうけることができる(A.2)と(B)動詞グループ(「恨(恨む)・煩惱(悩む)」など)を仮に「形容詞機能を備えている動詞」と呼ぶことにする。運動の過程**[c]**を取り出せる(A.2)は、量的に、或いは質的に変化する意味を表し、「起來」と共起して<漸進相>で解釈されやすい<sup>4)</sup>。

(6) 天已慢慢長起來，他又轉晃了兩三趟，才剛到五點來鐘。(駱)

日はしだいに長くなってきていて、彼がそれから二、三回回ってみても、やっと、五時になるやならずだった。(立間訳)

<sup>3)</sup> 劉(1998)、平井(1997)などを参照。また、副詞或いは文脈によって(A.1/A.2)が「起來」と共起して<始動相>の意味で解釈される場合もある。平井(1991)を参照。

<sup>4)</sup> 副詞成分によって、(A.2)と共起する「起來」が<結果相>の意味で解釈される場合もある。

3. <始動相>：基本的に「玩（あそぶ）・跑（はしる）・燃燒（燃える）・懷疑（疑う）・發怒（怒る）」のような (A.3) の主体動作を表す意志動詞・非意志動詞、(B) の主体の思考・感情・感覚を表す意志動詞・非意志動詞と共起する。(A.3) と (B) 動詞グループは内的限界点**㊦**をもたないので、必然的に結果を生み出すことができず、描写の視点が結果以外のところに置かれている。「起」は「起点を重んじている下から上への空間的移動」を表すことから、出来事の開始時点**㊦**に焦点が当てられる<始動相>を表すようになるのではないかと思われる。(8) のように客体と共起している動詞に「起」だけがついても<始動相>を表せることがそれを裏付けている。

(7) 他舉起自己的詩稿，在粗厲的風嘯聲中朗讀起來。(北)

彼は自分の詩稿を掲げて、荒々しく厳しい風の逆巻く中で朗読し始めた。(磯部訳)

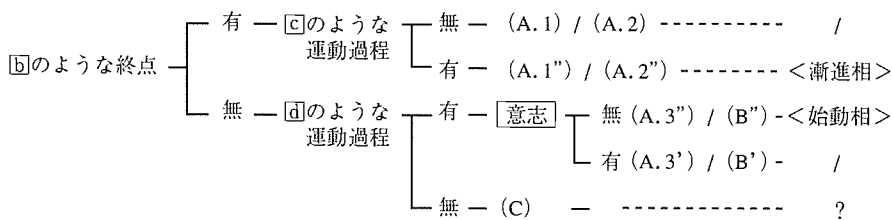
(8) 日本人的軍樂隊奏起歡迎曲。(四)

日本人の軍樂隊は歡迎の曲をいっせいに演奏しはじめる。(日下訳)

## 2.4 動詞の類型と「てくる」のアスペクチュアルな意味

「てくる」の中心的な概念はある基準に対する接近を表す。基本的に、動詞の語彙的意味に規定されており、「てくる」の表す接近といった意味には複数のバリエーションが生じる。

<図 3 >



1. <漸進相>：基本的に「(A.1'') 失う、(A.2'') 腐る、晴れる、弛む、冷える…」等の非意志動詞としか共起できない。運動の過程**㊣**を取り出せる（量的に、或いは質的に変化する意味が含まれている）非意志動詞が「てくる」と共起して<漸進相>の意味で解釈されやすいが、「てくる」は**㊦**に接近することを表すと思われる。その接近の程度が(9)のように「すこし」、または「だんだん、大分、非常に」などによって表現される。

(9) 足もとの雪も少しゆるんで来るらしかった。(雪)

2. <始動相>: 基本的に「(A.3”) 降る、揺れる、燃える、光る、(B”) 心配する、ドキドキする、震える、見える、聞こえる」等の非意志的主体動作を表す動詞と非意志的主体の心理活動を表す動詞と共起する。(C) 静態動詞に属する「似る、違う」等も「てくる」と共起して<始動相>の意味で解釈され得る。運動の過程[d]を取り出せる非意志動詞が「てくる」と共起して<始動相>を表せるが、これは「てくる」が「起」のように「始動」の意味を表せるからではなく、むしろ、「てくる」が「ある基準に接近する」ことを表すことから、話し手の知覚世界に接近することへ転じて、さらに現象の発生を表す<始動相>の意味に転じたのではないかと思われる。

(10) …、少し濡れた目で彼を見上げた葉子に、島村は奇怪な魅力を感じると、どうしてか反って、駒子に対する愛情が荒々しく燃えて来るようであった。(雪)

3. <反復継続相>: 「V+てくる」の表す意味が<漸進相>か<始動相>かは主に動詞の類型によって決められるのに対し、「V+てくる」が<反復継続相>の意味で解釈される場合は動詞の類型に関わらず、主に副詞または文脈によって表される。

(11) なぜなら、あの夜以来、信夫は猛然と自分の情欲と闘って、そのたびに打ち勝ってきたからであった。(塩)

因爲從那一夜後，信夫猛然和自己的情慾搏鬥，而且戰勝了。(吳訳)

### 3 「起來」と「てくる」における対応関係

#### 3.1 「起來」と「てくる」が表すアスペクチュアルな意味の違い

前節では「起來」におけるアスペクチュアルな意味用法と、「てくる」におけるアスペクチュアルな意味用法をそれぞれ見てきた。(4) (5) と (11) が示すように、「起來」が<結果相>を表す場合と「てくる」が<反復継続相>を表す場合は「起來」と「てくる」は対応しない。それに対し、「起來」と「てくる」は両方とも、<始動相><漸進相>を表せるが、次に論じるように、両者が必ずしも対応するとは限らない。

#### 3.2 「起來」と「てくる」が表す中心的な概念の違い

「起來」と「てくる」の表す中心的な概念が異なっているので、「起來」と「てくる」が共起できる副詞も次のように異なっている。

<始動相><漸進相>を表す「起來」は[a]の表す開始時点を重んじている新しい状態への変化を表すので、「突然 (突然)、逐漸 (だんだん)」などの副詞と共起する (例 (12)) が、(13) のように「始動的な意味」と相容れない程度の高いことを表す副詞「相當 (大分)」とは共起することが出来ない。

それに対し、〈始動相〉〈漸進相〉を表す「てくる」はある基準に対する接近を表すので、「突然、だんだん、ますます、すこし、大分、そろそろ」などの副詞と共に共起する。つまり、㉔の表す終点に接近する最初、真中、最後のいずれもの段階を表すことができる。

(12) だんだん頭が混乱してきたので、私は彼女との会話をあきらめることにした。(世)

我頭腦逐漸混亂起來，於是我決定不再和她說話。(頼訳)

(13) 「おや大分むずかしくなってきたようだ。…」(吾)

「呵，似乎越來越難懂了。…」(李訳)

→\*「相當難懂起來了」

### 3.3 「起來」と「てくる」が共起する動詞類型の違い

まず、先行研究でも述べられているように、「意志動詞」が「起來」と共起する場合は「てくる」が対応しない。(A.1') (A.2') が「起來」と共起して〈結果相〉の意味で解釈されやすいので、正確に言えば、(A.3') と (B') が「起來」と共起して〈始動相〉の意味で解釈される場合、「てくる」が対応しない。

(14) 他又想念起那條神秘的北方大河來，…。(北)

彼は再びあの神秘的北方の大河を思い始めた。……。 (磯部訳)

一方、「起來」と「てくる」の両方とも「非意志動詞」と共起できるが、「起來」が共起できる非意志動詞に限られているので、両者は必ずしも対応するとは限らない。以下では、動詞が結果補語をとるかどうか、形容詞機能を備えているかどうかによって「てくる」と「起來」の対応関係を検討する。

#### 1. 「結果補語」をとるか

(A.3'') 非意志的動作動詞「燃える、響く、降る」と (B'') の感情・感覚動詞「震える、緊張する・(喉が) 渴く」のような動詞の場合は、「起來」と「てくる」は対応している。この類の動詞は中国語に訳されると、「結果補語」をとらない「燃燒、響、下、顫抖、緊張・渴…」などになる。

(15) 葉子は今に体まで顫えて来そうに見えた。(雪)

看起來葉子好像連身子也要顫抖起來了。(蕭訳)

それに対し、(A.1'') 「失う」と (B'') の知覚動詞「聞こえる、感じられる」のような動詞の場合は、「てくる」と「起來」は対応しない。この類の動詞は中国語に訳されると、「結果補語」をとる「失去、聽得見、感到」などになり、「起」の表す「始動的な意味」と相反することになるので、「起來」と共起できないと考えられる。

(16) 野鳥は喧嘩を買われたような気がして怒った。ひかえ目を失って来た。(友)

野島有點生氣，說話也不客氣了。(石訳)

(17) きちんとした間隔をおいて心音が聞こえてくるだけだった。(世)

只有相隔一段確定的時間聽得見心音而已。(頼訳)

## 2. 形容詞機能を備えているか

形容詞機能を備えている動詞の場合は対応する。(A.2'') 非意志主体変化動詞「晴れる、曇る、(形容詞+) なる…」などは中国語に訳されると、形容詞の文法機能を備えていて、「很(とても)・非常(非常に)」等の程度副詞によって修飾を受けることができる「晴朗、陰暗、(+形容詞)…」などになる。

(18) 綺麗な写真だったが、見ているだけで肌寒くなってきた。(世)

是一張漂亮的照片，但光看著都會覺得冷起來。(頼訳)

それに対し、同じ(A.2'') 非意志主体変化動詞に属する次の a と b は中国語に訳されると、形容詞機能を備えていない動詞になる場合、「起來」が対応しない。

a. (A.2'') 「変わる、酔う、醒める、染まる」など。

b. (A.2'') 「なる」は形容詞以外の品詞(名詞、動詞、名詞述語埋め込み文、動詞述語埋め込み文)と共起する場合

(19) 面白いほど早く酒が醒めて来た。(雪)

說也奇怪，這次酒醒得很快。(蕭訳)

(20) 盃といえば、近ごろ、ほくは少しずつ酒も飲めるようになってきたよ。(塩)

說到舉杯，最近我逐漸會喝酒了。(呉訳)

以上のように、(A) タイプまたは (B) タイプに属する非意志動詞の場合は動詞が結果補語をとるかどうかが、形容詞機能を備えているかどうかによって、「起來」と「てくる」の対応関係が異なっていることがわかる。「起來」だけではなく、「下來/下去」と「てくる/ていく」の<漸進相>における対応関係も動詞に形容詞機能を備えているかどうかによって変わってくる。

呂(1965)によると、形容詞「多(多い)/少(少ない)」「大(大きい)/小(小さい)」のように両者が数量・容量・重量等、ある種の属性についての単純な「正(プラス)/負(マイナス)」を示すものと、「熱心(熱心だ)/冷淡(冷淡)」「堅強(強い)/軟弱(弱い)」のようにそれぞれ「望ましい/望ましくない」という主観の評価を表すものに分けることができるという。

基本的に「マイナス」と「望ましくない」は「下來/下去」と結びつきやすい。「起來」は「プラス、望ましい」と「マイナス、望ましくない」の両方とも結びつくことができるが、「プラス、望ましい」とのほうが結びつきやすい。即ち、「マイナス」に属する(1)「慢」の場合は「下來/下去」とも共起できるが、「プラス」に属する(6)「長」

の場合は、「起來」のみが共起できるのである。

・…。「他的脚步就慢起來了」。(歩みはしだいにのろくなる) (前掲例)

⇒「他的脚步就慢下來了」「他的脚步就慢下去」に言い換えても文法性が落ちない。

・天已慢慢長起來，…。(日はしだいに長くなってきていて、…) (前掲例)

⇒「天已慢慢長下來」「天已慢慢長下去」は非文になる。

「マイナス」とされる形容詞機能を備えている動詞「黒(暗い)・鬆(弛む)・安靜(静か)・平靜(落ち着く)」などと共起する場合のみ、「下來/下去」が「てくる/ていく」に対応しやすい。

(21) 他聽着徐華北的發泄。他漸漸平靜下來了。(北)

彼は徐華北が当り散らすのを聞いていた。彼はだんだん落ち着いてきた。(磯部訳)

(22) 他的臉又瘦了下去。(文)

彼の顔はまたやせていった。(中山訳)

次に、森山(1988)で指摘されているが、(C) 静態動詞である「違う、似る」なども「てくる」と結合することができる。しかし、「違う、似る」に相当する意味を持つ「相似・不相同」などは「很(とても)・非常(非常に)」の修飾を受けることができるものの、「起來」と共起する用例が見つからなかった。

(23) 夜はむろん昼とちがって、気骨もおれるし、疲れかたもひどい。したがって、実入りのほうもそれだけちがってくるのだ。(立間訳)

夜間，當然比白天需要更多的留神與本事，錢自然也多掙一些。(駱)

#### 4 「起來」と類似している日本語は「てくる」?

日本語の「てくる」は<結果相>を表せず、<始動相>を表せるものの、意志動詞と共起できないのに対し、「起來」は結果的な意味用法も存在し、意志動詞とも共起できる。この事実から果たして「起來」の派生経路が「てくる」に類似しているのかどうかは疑問に思われる。但し、日本語においても、「だす」のように、結果の意味を表す用法が派生したばかりではなく、意志動詞とも共起して<始動相>を表す用法をもつ方向移動動詞もある。森田(1989)では、「だす」における意味が次のようにまとめられている。

- A. 中にある事物を外側へ、表面のほうへと移し現れるようにする。「あばきだす、追出す、差し出す、押し出す、誘い出す」など。
- B. “内面→外面”の移行現象が結果としてある新しい状況を作る、結果をあとに残すのを表す。「編み出す、描き出す、弾き出す、作り出す」など。

C. 行為・作用が継続的な動作や反復動作、多数の主体によってなされる連続動作を表す。「言い出す、動き出す、書き出す、笑い出す、走り出す」など。

A、B、Cはそれぞれ本稿の<空間移動>、<結果相>、<始動相>の意味用法に該当する。本稿では、「起來」と「だす」の<始動相><漸進相>における対応関係についてこれ以上は検討しないが、両者がともに、意志動詞及び非意志動詞と共起できるということは明らかである。

(24) 駒子がつぶやくと、その空を見上げたまま、また走り出した。(雪)

駒子喃喃自語。她仰望着太空，又跑了起來。(蕭訳)

(25) …骨組の木が二三本傾いて来て、葉子の顔の上で燃え出した。(雪)

…，接連又倒下兩三根木頭，打在葉子的臉上燃燒起來。(蕭訳)

また、「だす」は「起來」の<結果相>と対応してはいないものの、それによって表される結果的な意味は「起來」と同じように特殊である。

(26) 火は藁の堆積の複雑な影をえがき出し、……。(金)

火苗把稻草堆積的複雜的影子描畫了出來……。(陳訳)

以上のことから、「起來」の派生経路が「てくる」よりも、「だす」のほうに類似しているのではないかと思われる。

## 5 まとめ

以上、「起來」と「てくる」におけるアスペクチュアルな意味用法を対照させた結果、以下のような点が明らかになった。

1. <反復継続相>は動詞より副詞または文脈などと深く関わっているが、<結果相><始動相><漸進相>は基本的に動詞の語彙意味によって決められる。
2. 「起來」が<結果相>を、「てくる」が<反復継続相>を表す場合、「起來」と「てくる」は対応しない。「起來」と「てくる」はともに<始動相><漸進相>を表せるが、「てくる」が非意志動詞としか共起できないので、意志動詞の場合は「起來」と「てくる」は対応しない。非意志動詞の場合も、「てくる」が次のような非意志動詞と共起する場合「起來」は対応しない。
  - ・ (A.1) 「失う」、(B) の知覚動詞「見える・聞こえる」などと共起する場合  
→中国語に訳されると結果補語をとる動詞になる。
  - ・ (A.2) 「変わる・酔う・(動詞/名詞+) なる」などと共起する場合  
→中国語に訳されると形容詞機能を備えていない変化動詞になる。
  - ・ 静態動詞 (C) 「似る・違う」などと共起する場合
3. <始動相><漸進相>を表す「起來」は開始時点 (a) を重んじている新しい状態へ

の変化を表すので、「相當（大分）・非常（非常に）」のような程度の高いことを表す副詞と共に起できない。それに対し、＜始動相＞＜漸進相＞を表す「てくる」はある基準に対する接近を表すので、「突然、だんだん、ますます、すこし、大分、そろそろ」などの副詞と共に起し、動詞の表す語彙的意味 (㊦) に接近する最初、真ん中、最後のいずれの段階も表すことができる。

### 主要参考文献

- 大島中正 1988「反復継続と漸進の相—シていくとシてくるの考察」『同志社国文学』30, pp.21-38
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 靳衛衛 1994「中国語『V+起・來』をめぐって—日本語の表現との対照研究」『愛知大学文学論叢』107, pp.182-156
- 1995「中国語『V+起・來』をめぐって—日本語の表現との対照研究（続）」『愛知大学文学論叢』108, pp.33-55
- 張麟聲 1993「試論兼跨空間・時間範疇的表達方式」『漢日語言対比研究』, pp.110-123  
北京大学出版社
- 平井和之 1991「“～～起來”の表す意味」『東京外国語大学論集』42, pp.147-164
- 1997「“～起（來）”の結果義について」『中国語』2, pp.68-73
- 森田良行 1989『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 呂叔湘 1965「語文札記」『中国語文』5, pp.343-348
- 劉月華 1998『趨向補語通釋』北京語言文化大学出版社
- 劉月華ほか 1988『現代中国語文法総覧（上）』くろしお出版

### <引例書目と略号> ( ) 内は本文内略号

- (駱)『駱駝祥子』老舍／『駱駝祥子』立間祥介訳 1984 岩波文庫
- (四)『四世同堂』老舍／『四世同堂（下）』日下恒夫訳 1983 学習研究社
- (文)「文博士」老舍／『趙子曰・ドクター文』中山時子訳 1982 学習研究社
- (北)「北方的河」張承志／『北方の河』磯部祐子訳 1997 露満堂
- (子)「子夜」茅盾／『現代中国文学2』竹内 好訳 1970 河出書房新社
- (三里)「三里灣」趙樹理／『現代中国文学8』岡崎俊夫訳 1971 河出書房新社
- (友)「友情」武者小路実篤／『友情・愛と死』石榴紅文字工作坊訳 1994 久大文化

- (雪)『雪国』川端康成／『雪郷・千羽鶴・古都』蕭羽文訳 1987 志文出版社
- (世)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹／『世界末日與冷酷異境』頼明珠訳 1994 時報文化出版社
- (塩)『塩狩峠』三浦綾子／『塩狩嶺』吳曉芬訳 1993 小暢書房
- (金)『金閣寺』三島由紀夫／『金閣寺』陳孟鴻訳 1987 志文出版社
- (三四)『三四郎』夏目漱石／「三四郎」書路 <http://shulu.net/wg/341>
- (吾)『吾輩は猫である』夏目漱石／『我是猫』李永熾訳 1997 遠景出版社